

璉城寺（紀寺）総合学術調査3

佐久間 貴士

長谷川 伸三

要旨

本論は璉城寺総合学術調査の二〇〇九年度の概要報告である。昨年度までの概要報告は『論集』第45号、46号に掲載した。

長谷川は古文書整理作業の進捗状況を報告している。璉城寺は江戸時代中期に本堂が再建されている。長谷川は璉城寺文書から璉城寺再興の史料を紹介している。また江戸時代中期の璉城寺の本堂と境内図が発見されており、その史料も合わせて紹介している。

佐久間は発掘調査の概要報告である。本年度は、昨年度に引き続き第4区の調査を継続した。昨年度は、地面から近現代の地層を掘り下げ、調査区東側で南北に並ぶ石列を発見した。本年度はさらに掘り下げを続けた結果、この石列が石垣であることが判明した。この石垣の上面には瓦や石が敷き詰められており、基壇状になっていた。石垣の最初の築造時期は江戸時代と推定している。また遺構面が二面確認された。第一遺構面は石垣が造られた地面で、江戸時代から近代の地面である。さらに一〇cmほど下に第二遺構面がある。これは検出途中である。この

面には中世とおもわれる遺構があり、第4区の調査は来年度も引き続き実施する。

はじめに

奈良市西紀寺町四五にある璉城寺の総合学術調査は二〇〇九年度で五年目である。璉城寺の歴史は『璉城寺縁起』の一部が翻刻されることによって、奈良時代に行基が創建し、平安時代に紀有常が再興したと伝えられている。また本尊の裸形阿弥陀仏像は平安時代に一条天皇の中宮上東門院の願いによって恵心僧都（源信）が製作したとされている。璉城寺にはこれまでの調査で、室町時代と推定される縁起と江戸時代制作の縁起の二種あることが判明している。発掘調査では、出土瓦から奈良時代の創建であることは確実だが、行基の活躍した八世紀前半の創建かどうかは未だ検討中である。総合調査の目的はこうした璉城寺の実際の歴史を知るために古文書調査・発掘調査を中心に行っている。

総合調査は大阪樟蔭女子大学学芸学部日本文化史学科と大阪樟蔭女子

大学地域文化センターの共同事業で実施している。日本文化史学科では、二〇〇七年度から授業として取り入れてきた。残念ながら日本文化史学科は本年度をもって廃止される。それにかえて本年度から国文学科歴史文化専攻の三回生を対象に「地域歴史文化総合研究B」の科目となっている。しかし調査自体は履修していない学生も学年とかわりなく毎年多数参加して行ってきた。調査指導は本学の教員が当たり、調査は本学学生と卒業生、神戸大学考古学研究会・璉城寺友の会や地元住民の協力をえて実施している。

一 調査の経緯と調査体制

(1) 調査の経過

古文書調査は「下間家文書」と「璉城寺文書」に分けて調査を作成している。

璉城寺は法相宗・浄土宗・天台宗と変遷し、昭和一九年に住職として下間玄恵が入り、浄土真宗となった。下間家は親鸞上人に仕え、戦国時代には教団の指導的な武将として活躍した。伝来の系図を見ると本願寺教団が戦った日本各地で一族が討死や自害をしている。江戸時代には本願寺の有力な坊官を多数輩出した。玄恵家はその内の宮内卿家と呼ばれた家系で、西本願寺に仕えた。そのため璉城寺には江戸時代天台宗であった時期の璉城寺の古文書と下間家に伝来した古文書とが残されている。古文書調査は「下間家文書」から開始し、現在は「下間家文書」と「璉城寺文書」の調査作成を行っている。

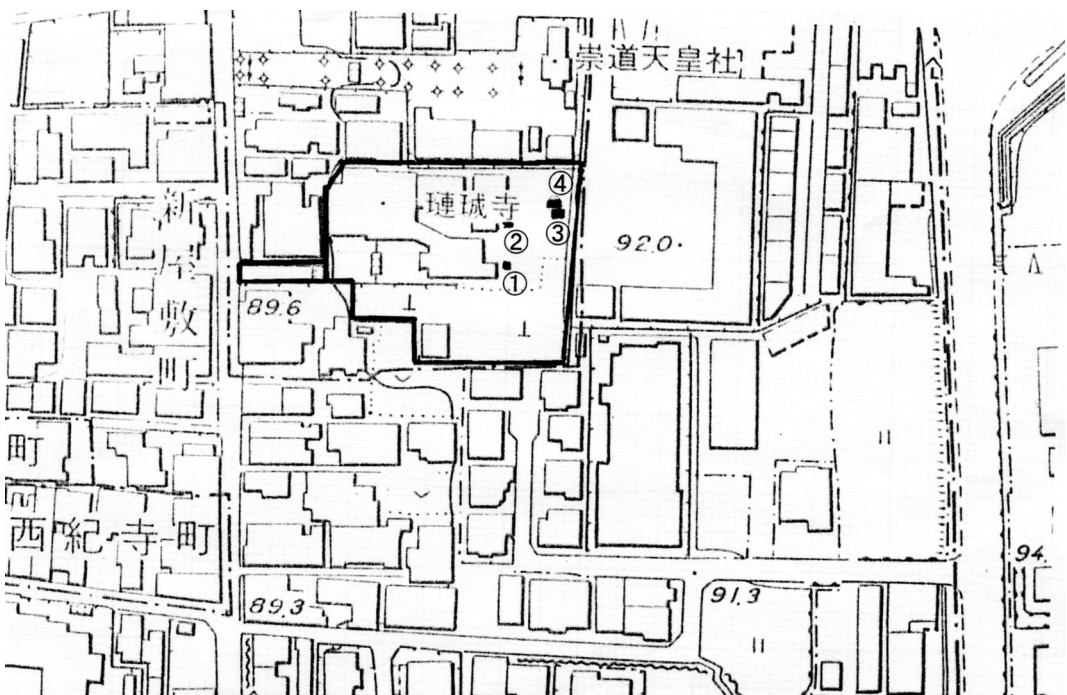


図1 璉城寺発掘調査区位置図（縮尺 1/2500, 上が北）

発掘調査は二〇〇五年度に第1区(4㎡)、第2区(3㎡)、二〇〇六・二〇〇七年度に第3区(15㎡)を調査し、二〇〇八年度は第4区(14㎡)を調査中である(図1)。調査区のお大半は近現代の盛土やごみ穴であったが、第3区で室町時代の遺物包含層(或いは溝)を確認し、第4区で江戸時代或いは近代の石列を確認した。この石列は本年度の調査で石垣と確認された。

二〇〇九年度は引き続き第4区を調査した。前述の石垣(江戸時代築造と推定)を確認するとともに近代から江戸時代の遺構面と土壇四基を検出した。この遺構面の下にもう一面遺構面があるが、本年度の調査はここで終了した。

遺物量はコンテナで第1区一箱、第2区二箱、第3区二五箱、第4区(調査中)は五三箱である。遺物の種類は古墳時代の須恵器と奈良時代から近代までの瓦・土器・陶磁器などである。瓦は奈良時代から江戸時代までのすべての時代のもので出土しており、璉城寺が奈良時代の創建以来連綿と維持されてきたことが確認される。

(2) 調査体制

調査組織は以下の通りである。

璉城寺(紀寺) 総合学術調査団

代表 佐久間貴士 教授 考古学

調査指導 堀裕 准教授 古代史

長谷川伸三 元本学教授 非常勤講師 近世史

中村直人 非常勤講師 中世史

広松良雄 檀原考古学研究所 考古学

調査参加者本学(二回生) 牛尾春江・千葉有咲美・中川千亜紀

浜本聡美

(三回生) 池谷静佳・池田真理子・磯崎梨紗

上田彩加・加藤奈都美・小山真美

竹中舞香・瀧山啓子・鳥居はづき

西奥明香・畑友加里・丸太弥生

山原摩子・李玉麗

(卒業生) 川端夕貴・小嶋千尋・浜本智代

日野美香・松田憲子・山室朋子

吉田梓乃

(神戸大学考古学研究会) 猪狩明浩・宇古誠

近藤育海・崎山拓也・富田晋吾

中村優貴・西澤渉・浜口雄太

藤本順平・和田拓実

(璉城寺友の会・地域住民) 下間景甫住職

子安美汀子・徳田英・野尻幸男

牟田口淳

第4次の調査期間は二〇〇九年八月三十一日から九月十二日で、八月三十一日は機材の搬入を行い、実際の調査は九月一日から行った。九月六・十一日は休日とし、十二日に撤収した。

二 古文書整理作業の状況

璉城寺所蔵の古文書は、「璉城寺文書」と「下間家文書」に大別できるが、璉城寺文書は巻軸など別置されているものを除いて、実際には量的に多い下間家文書に混入している。そこで古文書のほぼ全部を下間家文書の名称のもとで、保存状態を生かして「下間家一」以下の文書保存箱に入れ替えている。今後文書目録（データベース）の作成段階で、璉城寺文書を抽出できるようにしたい。昨年度は「下間家五」箱までであったが、今年度は庫裏や本堂に置かれていた文書箱や櫃から文書を入れ替えて「下間家六」～「下間家八」箱が増加した。

以下に箱ごとの文書点数と調査の進行状況を示しておく。なお点数は原則として文書一点を中性紙封筒にいれて番号を付けたものを一点とする。一括して保存されていた文書を別の封筒に入れる場合は枝番号をつけ、これらも各一点とした。

下間家一	五七点	調書作成済み
下間家二	三二四点	調書作成済み
下間家三	六一点	調書作成済み
下間家四	三六二点	調書作成済み（箱四一、四一二）
下間家五	一六三点	うち一二八点調書作成済み
下間家六	一〇三点	調書未作成
下間家七	一〇九点	調書未作成
下間家八	五五点	点数未確定、調書未作成

古文書の総点数は一、一八四点多となり、そのうち調書作成済みは、

今年度二四〇点を加え、九三二点である。全点のほぼ七九パーセントの調査を終えたことになる。またデータベース化は本年度は行えず、一一〇点（下間家一の全部と下間家二の一部）にとどまっている。

「当寺中興由来記」について

近世の璉城寺について、前々回の報告「文献に見る近世の璉城寺」（璉城寺（紀寺）総合学術調査）では、次のように記した。慶長七年（一六〇二）八月徳川家康より朱印地二〇石を与えられた。享保年中璉城寺の住僧が乱行して、寺産什物を忍辱山来迎寺（注一忍辱山（にんにくさん）円成寺来迎院、奈良市忍辱山町）に売って真言宗に改宗しようとしたが、本寺誓願寺がこれを止めた。悪僧はいったん亡命逐電したが、ついに京都で禁獄のうえ追放になった。享保八年（一七二三）十二月、法相宗興福寺（奈良）と浄土宗誓願寺（京都）との間に璉城寺をめぐる本末争論が生じ、朱印地を没収された。以後、天台宗京大仏養源院を本寺とした。享保一四年（一七二九）本堂を再興した。

今回以上の経過を裏付ける史料「当寺中興由来記」を見出したので、以下に原文のまま紹介する。

（表紙）

「当寺中興由来記」

一当寺天台宗ニ改、京大仏養源院末寺ニ成候事ハ、享保年中本末之義ニ付、興福寺と誓願寺と及争論ニ、公儀江御断申上候所、是非依難分、寺院被 召上、暫無住ニ而有之候、然ルに養源院大僧正、享保九辰年

二月廿二日、京町 御奉行河野豊前守様・本多筑後守様江別紙書付之通御願有之候、同年四月廿一日本多筑後守様於 御役所、右御兩人御列座ニ而願之通被仰渡候、明ル廿二日ニ右之趣一行房を以南都 御奉行 中坊美作守様江御届有之、御聞濟之上、養源院役者泰宴、同役人小畑万右衛門右兩人罷下、同四月廿八日本尊并御位牌等請取ニ付、住職之儀ハ則泰宴江大僧正より被仰付、同閏四月四日ニ致入寺候、尤右之趣先達而 日光 御門主様江大僧正御届有之所、御奉書致到来候、且又 御朱印之義ハ 御所司代 松平伊賀守様御預置被成候所、同閏四月十五日河野豊前守様於 御役所大僧正江置ニ御渡被成候、爾来天台宗ニ改、養源院末寺ニ成候、右之段は本寺日記有之候、肝要之事のミ記置候、後人曾大ニ考可為後記者也

願書之写

一南都紀寺町璉城寺事、寺領被召上無住ニ而有之候段承知仕候、就夫養源院義大寺不相応ニ末寺無御座候故、御法事等之節事欠申候義多御座候、依之右璉城寺義御願申上、養源院末寺ニ仕、住職之僧差遣申度奉存候、右願之通何卒被 仰付被下候様ニ奉願候、已上

養源院前大僧正

享保九年辰二月十二日

泰実 印

御奉行所

御奉書之写 (略)

然処泰宴儀享保九年辰ノ四月より五箇年之住職ニ而、大仏勧化所之僧実円ニ住職を譲リ京都ニ隠居ス、同十四年酉ノ年より十七年実円住職して同勧化所之弟子実啓に住職を譲、延享二丑ノ年より三十一年之住職、此間に本堂・庫裏共建立致し、寛保二丑年より四ヶ年病氣ニ而本服依難仕、又勧化所弟子ヲ貫、安永七年戌之年実弘住職ニ相成候、実啓は去安永六酉ノ十月十日致遷化、実弘住職ニ相成と直ニ不法乱行共之我俛見兼、実啓兄又五郎と及爭論候、此間三ヶ年罪狀分明ニ御糺明之上、安永九子年於京都追放被 仰付候、依之亦僧法系断絶して亦無住罷成候処、丹州永合寺弟子信行坊養源院ニ而住職被 仰付、安永十丑ノ三月五日京都より当寺へ入寺罷有候、此年三月ニ改元ありて天明元年丑ノ年也

(張り紙一)

「文政五年午年十月快融隱居、弟子道融江渡住職、進退願養源院江被差出し候書狀等之控」

(張り紙二)

「文政五年午年十一月迄四拾式ヶ年之間、住職病身ニ付寺内致隱居、弟子道融江後住職、従本寺許容有之候事」

この史料によると、朱印地没収後無住となった璉城寺に養源院が住職泰宴を派遣して再興した。享保一四年(一七二九)より実円が一六年間住職をつとめ、延享二年(一七四五)より実啓が三年間住職をつとめ、この間に本堂・庫裏を建立した。安永七年(一七七八)より実弘が二年

間住職をつとめたが、不法乱行があり、安永九年京都で追放された。一時無住になったが、安永一〇年（一七八一）より快融が四一年間住職をつとめ、文政五年（一八二二）弟子の道融に住職を譲った。また本堂・庫裏の建立は延享二年以降、住職実啓の代ということになる。璉城寺には写真1・2に示した建物の見取り図がある。本堂・廊下・入口門・表門は現状と一致しており、庫裏も後の増築部分を除けば、現状と一致する。米蔵は現存しない。この見取り図は一七五〇年前後に作成され、本堂・庫裏の建立も同じ頃と見てよいのではないか。建築史からの調査が期待される。

ところで堀裕氏は、璉城寺所蔵の『璉城寺縁起』、『璉城寺縁起』写本と『璉城寺紀』（『大日本仏教全書』（寺誌叢書第三）所収）を比較検討し、写本への書込みや『璉城寺紀』の奥書により、延享三年（一七四六）に璉城寺現住沙門から古新伝来の縁起を勘考することを求められた無名山人が完成したのがこの『璉城寺紀』だとしている（『璉城寺縁起』写本とその書込みについて）『璉城寺（紀寺）総合学術調査2』。現住沙門は実啓であり、住職就任後間もなく縁起の再編成を志したということになる。前述の本堂・庫裏の建立を志したのも同じ時期であろう。近世後期における璉城寺の事蹟の解明は、今後を期したい。

三 二〇〇九年度発掘調査の概要

本年度は昨年度に引き続き第4区の調査を行った。第4区は寺の敷地の東側（本堂の裏）、第3区の北側に隣接している。面積は東西二・五

m、南北五・七m、約一四m²である。昨年度東端で石列が検出されたので、東側を二〇cm拡幅した。ここは寺の本堂の敷地から六〇から七〇cm高く、新墓地の予定地となっている。その大部分は近代以降の盛土である。

（a）土層

堆積土は昭和六〇年代までの土層を第1層、近代から昭和六〇年代までの土層を第2層、江戸時代の土層を第3層とした。第1層は厚さ約六〇から七〇cm、炭や灰、ゴミがたくさん混じった土と、墓地造成の時に盛った山土である。第2層は、厚さ約一〇cmの上層と、厚さ約二五cmの下層とに分かれる。下層が石垣の上と石垣の前に堆積している。写真4で黒く見える層が第1層。その下が第2層である。第2層は多量の瓦を含んでおり、いずれも調査区東側にあった土塀を崩した時に堆積したものと考えられる。土塀は前節で紹介した江戸時代中期の璉城寺境内絵図に描かれている。住職さんのお話では、全体はトタン塀（現在はコンクリート擁壁）になっていたが、戦後しばらくの間土塀の一部が残っていたそうである。第3層は暗灰色粘質土で、黄色土のブロックを含んでいる。西側には第3層の下に山土のような固い黄褐色砂質土の盛土があり、この層の下に中世の土層がある。東半部では第3層の下が地山であるが、西半部は遺構があり、地山がまだ確認できていない。

（b）遺構

遺構は第3層の上面で検出されており、これを第1遺構面とする。この面からは石垣一ヶ所と土壇四基、土器や瓦の廃棄場所一ヶ所を検出し

た。江戸時代のものである（写真3）。

石垣1（写真5・6） 石の上面は地表下約七〇cmである。上部を第2層下層が覆っている。石は二〇cm大の河原石で西側に面をそろえて、南北に並んでいる。基礎に約三〇cmのやや大きな石を並べ、その上に二段から三段石を積み上げている。石垣上の地面には瓦や小石が密に敷き詰められていた。石垣は第1遺構面にのっており、この面の遺構はすべて江戸時代であった。この点から築造時期を江戸時代と推定している。また石垣は近代の第2層下層に覆われており、近代のある時期までは（戦前）、石垣が見えていたと思われる。

この石垣の約一m東側が隣地との地境である。この地境は現在コンクリートの擁壁が造られているが、戦後はトタン塀であった。それ以前は土塀があったとのことである。

この石垣は昨年度の報告（『論集』第四六号）で石列としたもので、本年度の報告で訂正する。

土器・瓦の集中廃棄場所（写真8）と土塀については調査途中であり、次年度に報告したい。

（b）遺物

本年度の第4区の遺物の出土量はコンテナ三四箱である。特に第2層下層の石垣の裾から集中的に瓦が出土した。その量はこれまでの調査で最も多い。大部分は江戸時代の瓦で、小型の軒平瓦を含むことから、土塀に使用された瓦の廃棄と考えられる。また奈良時代から安土桃山時代の瓦も多く出土している。また第2層下層から土師器の灯明皿が完全な

形で出土した（写真7）。

本年度調査の遺物は未整理だが、概要は以下の通りである。

古墳時代 須恵器

奈良時代 瓦・須恵器

平安時代 瓦・黒色土器

鎌倉時代 瓦・瓦器

室町時代 瓦・瓦質土器・陶磁器

江戸時代 瓦・土器・陶磁器

おわりに

今年は初めて雨で中断する日がなく、目いっぱい調査ができた。今年はあと少し掘り下げたらいいので、余裕で発掘調査が終了すると思っていた。ところが予想外に遺物の出土量が多く、石垣の検出に加えて、江戸時代から近代遺構面、さらにその下に中世か江戸時代の遺構面が一面ある。

江戸時代から近代の遺構面には江戸時代の遺物の集中場所が一ヶ所、土塀が四基発見された。なんとか掘りきって埋めたいと考えていたが、終盤になって地山と思った層が盛土と分かり、その下に中世の堆積層がまだある。これで埋め戻しを断念。こんな小規模の発掘に三年かかるかと思うと忸怩たる思いがあるが、発掘調査が初めてか二回目の学生ばかりなので、調査のスピードが遅くても、調査の内容を理解してもらうことに重点をおいた。しかし調査が遅れてお寺に迷惑がかかるのもいけま

せん。来年からは機械を導入して、近現代層はウンボで掘ろうと思っている。しかし石垣の発見と遺存状態の良好な江戸時代の遺構面の発見はとても嬉しいことだった。また中世層の確認もあり、中世の璉城寺の歴史の一端がつかめそうである。

最後にいつながら調査に協力していただいている下間景甫住職に厚く御礼申し上げます。また「璉城寺友の会」の皆様と地元の方には調査参加のみならず、テントの設営や食事の調理をすべてしていただきました。地元の田辺実さん、小林祥浩さんには飲み物の差し入れをしていただきました。あらためて皆様に御礼申し上げます。

また本学学生と卒業生、神戸大学考古学研究会の学生・OBの方々、よくがんばってくれました。

(付記)

執筆分担は、はじめに・一節・三節・おわりにが佐久間、二節が長谷川です。

本研究は大阪樟蔭女子大学平成十八～二〇(二〇〇六～二〇〇八)年度特別研究助成費を受けて書かれたものである。

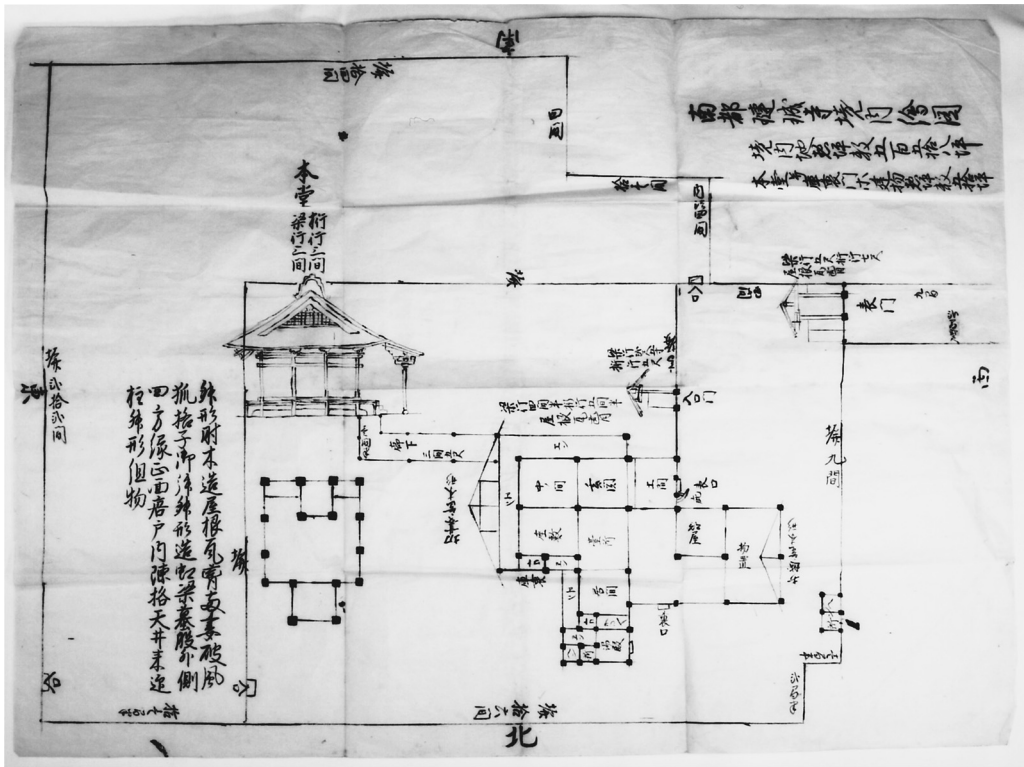


写真1 近世中期「南都 璉城寺境内絵図」(璉城寺所蔵)

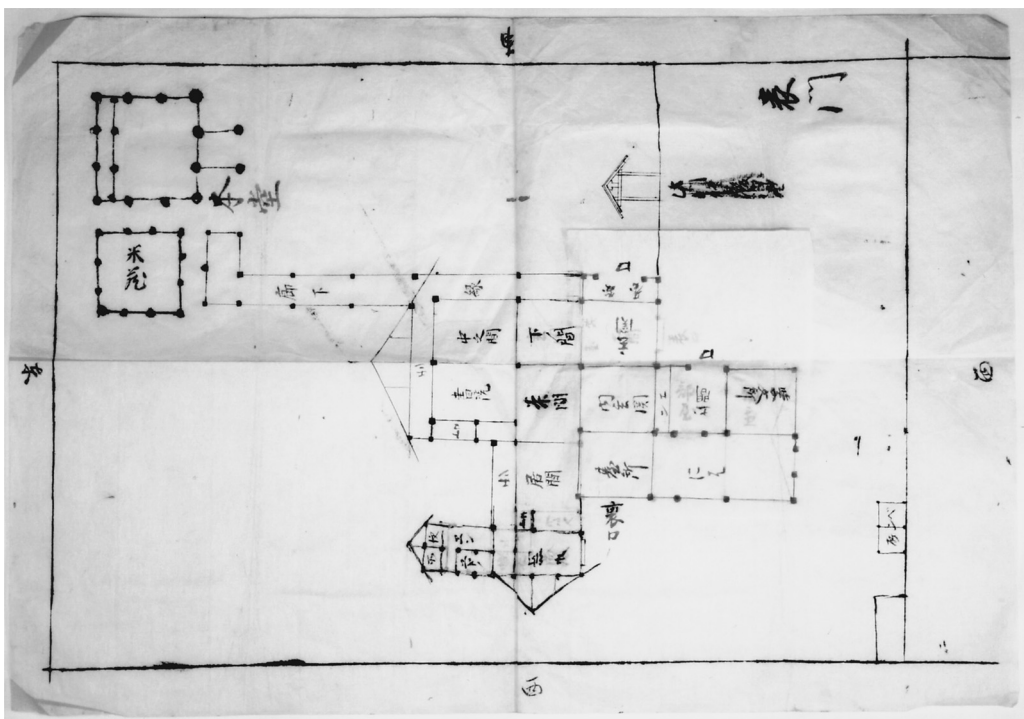


写真2 近世中期「(璉城寺本堂・米蔵・庫裏・表門の図)」(璉城寺所蔵)



写真3 第4区 第1遺構面（東から）



写真4 第4区 北壁土層



写真5 第4区 石垣1 (西から)



写真6 第4区 石垣1 (北西から)



写真7 第4区 土師器皿出土状況（第2層）



写真8 第4区 土器・瓦廃棄状況（東から）